

宗 教 研 究 第三六三号 目 次

公開シンポジウム

思想としての宗教

宗教としての〈親鸞〉思想	高田 信良	一
〈ポスト哲学的〉思索と〈宗教的なもの〉	杉村 靖彦	二
無心、信仰、スピリチュアリティ	西平 直	三
境界に立つ宗教研究	深澤 英隆	四
ディスカッションの要約		五

研究報告

パネル

戦前までの日本における諸宗教研究の現在の意義	菊地 章太	五
戦前日本における中国宗教研究	下田 正弘	六
戦前日本における仏教研究	芦名 定道	八
戦前日本におけるキリスト教研究	後藤 明	三
戦前日本におけるイスラーム研究	星野 英紀	三
パネルの主旨とまとめ		

見える宗教教育・見えない宗教教育

——宗教教育再考——

海外の公教育における	藤原 聖子	五
宗教教育の現状と日本への示唆	矢野 秀武	六
公認宗教制の中の宗教教育		
高校の教科書に見られる	江田 昭道	七
「仏教」について	弓山 達也	八
「心のノート」の可能性と限界	山中 弘	九
パネルの主旨とまとめ		

目次

生命倫理の問題は宗教および宗教学に何を問いかけるのか？

キリスト教において

生命倫理を語る可能性……………土井 健司……………二九

「宗教家」の生命倫理への取り組み……………佐藤 雅彦……………三三

宗教的な問いは

宗教抜きには問えないのか？……………森岡 正博……………四四

生命倫理という宗教性……………池澤 優……………五五

パネルの主旨とまとめ……………安藤 泰至……………六六

宗教哲学の現在を問う

——反本質論の波をうけて——

宗教哲学は本質論を離れうるか……………堀 雅彦……………六九

「宗教の本質」と歴史性……………小柳 敦史……………七九

神経科学の冒険……………松野 智章……………八〇

他性と多性……………佐藤 啓介……………八三

パネルの主旨とまとめ……………堀 雅彦……………八三

西田幾多郎の宗教思想

西田幾多郎の宗教思想の特質……………小坂 国継……………一〇五

西田の宗教思想とキリスト教的終末論……………浅見 洋……………一〇六

西田哲学と禅仏教……………井上 克人……………一〇七

内在的超越の宗教観……………高坂 史朗……………一〇九

パネルの主旨とまとめ……………藤田 正勝……………一一〇

近角常観とその時代

近代真宗の体験主義……………碧海 寿広……………一二二

近角常観と知識人青年……………岩田 文昭……………一二三

近代大谷派における

近角常観の位置……………ライアン・ワルド……………一二四

求道会館所蔵史料の意義……………大澤 広嗣……………一二五

パネルの主旨とまとめ……………岩田 文昭……………一二六

キリスト教受容と伝統思想

——武士道をめぐって——

キリシタンと武士道……………狭間 芳樹……………一二八

韓国の伝統思想とキリスト教……………方 俊植……………一二九

内村鑑三の武士道……………岩野 祐介……………一三〇

『武士道』にみる比較の言説……………東馬場郁生……………一三一

パネルの主旨とまとめ……………狭間 芳樹……………一三三

キリスト教思想の新しい可能性

——「宗教と科学」の問題圏より——

科学と神学……………濱崎 雅孝……………一三四

美のアイデアと自然の神学……………落合 仁司……………一三五

境界の脱構築……………金 承哲……………一三六

医学と宗教はどこで出会うのか……………杉岡 良彦……………一三八

パネルの主旨とまとめ……………芦名 定道……………一三九

目次

近世から近代へ

——日本仏教の再編成——

近世真宗における「法然」と「親鸞」	引野 亨輔	三二
分離せず、衝突せず	谷川 穰	三三
大乘非仏説論の歴史的展開	西村 玲	三三
〈日本仏教〉の探究	オリオン・クラウタウ	三五
パネルの主旨とまとめ	西村 玲	三六

明治仏教の国際化と変貌

明治二〇年代仏教界における

神智学をめぐる言説	吉永 進一	三七
明治期仏教とユニテリアニズム	高橋 原	三八
エリザベス・アンナ・ゴルドン夫人をめぐって	安藤 礼二	四〇
鈴木大拙における東洋と西洋	守屋 友江	四一
パネルの主旨とまとめ	吉永 進一	四二

明治仏教史を上書きする

「仏教」を「演説」する	星野 靖二	四四
演説・講演というメディアと近代仏教	岡田 正彦	四五
前田慧雲と「自由討究」	岩田 真美	四六
高嶋米峰と丙午出版社	大谷 栄一	四六
パネルの主旨とまとめ	大谷 栄一	四七

地域社会における慰霊顕彰の伝統と現在

近世農村における慰霊顕彰	清水 克行	五〇
近世武士社会における慰霊顕彰	森 謙二	五一
沖縄における遺骨収集の展開と慰霊顕彰	栗津 賢太	五三
パネルの主旨とまとめ	村上 興匡	五四

神仏分離研究の現代的意義

——神仏関係史の再構築を目指して——

近世・近代の神仏関係の位相	阪本 是丸	五五
宗教都市宇治山田における		

神仏分離の諸問題	牟禮 仁	五七
----------	------	----

近世における神仏関係	澤 博勝	五八
------------	------	----

日本と中国における

仏教と固有の宗教との交渉の比較	河野 訓	六〇
-----------------	------	----

パネルの主旨とまとめ	櫻井 治男	六一
------------	-------	----

神仏習合・神仏分離における神職・僧侶の諸相

——神仏関係史再考——

古代・中世の神社組織における神仏関係	加瀬 直弥	六三
賀茂別雷神神社における神仏関係の構造	太田 直之	六三
伊勢の神葬祭から見る神仏関係	本澤 雅史	六五
石川県内における神仏分離	由谷 裕哉	六六
パネルの主旨とまとめ	藤本 頼生	六七

目次

死者供養文化の深層

ヒトガミの誕生 佐藤 弘夫 一六九

石塔の思想史 松尾 剛次 一七〇

実験動物供養の起りりと展開について 岡田真美子 一七一

現代韓国における死者供養の変化

についての社会学的考察 井上 治代 一七三

パネルの主旨とまとめ 池上 良正 一七四

宗教間対話の思想

——歴史的諸相とそれらの対話——

ノージャンのギベールとイスラーム 矢内 義顕 一七五

ラテン人への憎悪を超える 橋川 裕之 一七六

近世初頭における「異教」との邂逅 比留間亮平 一七八

西欧における仏教理解 司馬 春英 一七九

イスラームにおける宗教間対話の理論 松本 耿郎 一八〇

パネルの主旨とまとめ 八巻 和彦 一八一

宗教とエコ・フィロソフィ

——東洋の宗教伝統を中心として——

ヒンドゥー聖地と環境問題 宮本 久義 一八三

中世ヒンドゥー教にみる

『地上の天界』説と環境倫理 橋本 泰元 一八四

輪廻と環境 渡辺 章悟 一八六

日本仏教とエコ・フィロソフィ 竹村 牧男 一八七

天人相関の理論と実践 野村 英登 一八八

パネルの主旨とまとめ 渡辺 章悟 一八九

ジェンダー宗教学の確立に向けて

ジェンダー宗教学の可能性 川橋 範子 一九一

イスラーム言説の利用と法識字 嶺崎 寛子 一九三

アジアにおけるキリスト教と

脱植民地主義の課題 香山 洋人 一九五

はざまの位置で 黒木 雅子 一九六

パネルの主旨とまとめ 黒木 雅子 一九六

教祖伝の脱構築

記憶・ナラティブ・教祖伝 宮本要太郎 一九七

新宗教文化の脱教団的展開 永岡 崇 一九九

稿本天理教教祖伝の成立 幡鎌 一弘 二〇〇

教祖像の力学 竹部 弘 二〇二

パネルの主旨とまとめ 幡鎌 一弘 二〇三

思想としての禅

——近現代における道元の発見——

諸仏諸祖は道得なり ラルフ・ミューラー 二〇四

無常仏性を基盤とする

ヒューマニズム グレオン・コプフ 二〇五

中国語圏における道元の発見 何 燕生 二〇六

パネルの主旨とまとめ 何 燕生 二〇七

目次

第一部份

イタリア宗教史学派の形成	江川 純一	二〇九
オットー宗教史学の方法論再考	澤井 義次	二一〇
ド・ブロスにおける		
宗教起源と言語起源の問題	杉本 隆司	二二一
デュルケームとモースの		
「隠された共同作業」	山崎 亮	二二二
M・エリアーデとルーマニア民族主義	佐藤慎太郎	二二四
往復書簡集からみるI・P・クリアーノと		
M・エリアーデの関係	佐々木 啓	二二五
亡命者エリアーデの		
思想における「宗教」	奥山 史亮	二二六
宗教における思考と感謝	浅野 章	二二七
宗教共同体の哲学的考察	小田 淑子	二二九
祈りにおける「かたどり」と「ちから」	木村 敏明	二三〇
G・サンタヤーナにおける		
自然主義と宗教	庄司 一平	二三二
《概念枠》としての宗教理解を巡って	飯田 篤司	二三三
科学と宗教とが扱う領域の相異について	冲永 宜司	二三四
日本における公共宗教(論)の射程	新矢 昌昭	二三五
宗教概念にまつわる言説空間	近藤 光博	二三六

第二部份

「プロテスタンティズムの哲学者カント」説		
の成立背景	後藤 正英	二三八
ドストエフスキーとカント	元春 智裕	二三九
カント『宗教論』における		
「根本悪」の普遍性	保呂 篤彦	二四〇
カントの宗教論の意義について	氷見 潔	二四二
ヤスパース形而上学とその希望論	岡田 聡	二四三
ヤスパースにおける存在の思弁	布施 圭司	二四四
脱宗教的精神性としての		
ヤスパース「哲学的信仰」	大沢 啓徳	二四五
『二源泉』以前の		
ベルクソン哲学における宗教性	伊達 聖伸	二四六
ベルクソン形而上学の宗教的指向性	安藤 恵崇	二四八
プラトン『法律』第一〇巻における		
魂の問題	土井 裕人	二四九
プロティノス哲学体系にみられる		
愛の階梯	堀江 聡	二五〇
紀元後四―五世紀の歴史叙述における		
「過てる哲人王」ユリアヌス	中西 恭子	二五二
擬ディオニュシオス・アレオパギテースの		
キリスト像	高橋 渉	二五三
転回と回心	松田健三郎	二五四
進化における宗教の問題	滝澤 克彦	二五五

目次

「信」と「虚構」に関する理論的研究……………谷内 悠……………二四八	Philosophia perennis という概念の
歴史的変遷をめぐる考察……………リアナ・トルファシュ……………二四八	

第三部会

S・ヴェイユの工場体験……………脇坂 真弥……………二五〇	ジャック・デリダの『コーラ（場）』
〈第三のもの〉を読む……………斎藤 明典……………二五二	
L・シュトラウスによる	
F・ローゼンツヴァイク批判の射程……………佐藤 貴史……………二五三	
『論理哲学論考』の	
「文番号七」の原形と新解釈……………星川 啓慈……………二五五	
ヘーゲル祭祀論の射程……………石川 和宣……………二五五	
ヴァイマル期ドイツの宗教思想……………宮嶋 俊一……………二五五	
テイリツヒの「究極的関心」と真理……………澤井 治郎……………二五七	
テキスト科学とインド哲学研究の	
方法論について……………三浦 宏文……………二五八	
再考ブーバー「我―汝」思想……………堀川 敏寛……………二五九	
マルティン・ブーバーと神経験……………大川 武雄……………二六一	
ポエジーと哲学……………田口 博子……………二六三	
フィヒテとシェリングにおける	
ヨハネ解釈について……………諸岡道比古……………二六三	
キルケゴール思想における	
罪の不可避性について……………行武 宏明……………二六四	
ハイデガーの現象学とキルケゴール……………若見 理江……………二六六	

ハイデッガーと洞窟の比喻……………田鍋 良臣……………二六七	Sein zum Tode 再考……………松本 直樹……………二六八
--------------------------------	------------------------------------

第四部会

近世初期キリシタンの長崎大殉教図と	
日西関係……………谷口 智子……………二七〇	
キリシタンにおける近世と近代……………内藤 幹生……………二七一	
ブラジル産ネオペンテコスタリズムの	
日本における展開……………山田 政信……………二七三	
田中輝義の意識論……………寺尾 寿芳……………二七三	
新渡戸稲造と国際交流……………森上 優子……………二七五	
聖書・学問・共同体……………柴田真希都……………二七六	
遠藤周作の思想	
「母なるもの」再考……………長谷川(間瀬)恵美……………二七七	
神谷美恵子の宗教思想……………釘宮 明美……………二七八	
内村鑑三とA・J・ヘシェル……………手島 勲矢……………二八〇	
回心の比較宗教……………徳田 幸雄……………二八二	
ヘーシユカストの祈りにおける身体技法……………袴田 玲……………二八三	
野宿者の入信動機……………白波瀬達也……………二八三	
「民衆」概念による	
近世フランス神秘主義へのアプローチ……………渡辺 優……………二八四	
ヴィジョンとイメージ……………細田あや子……………二八六	
マルグリット・ポレートに対する	
異端審問について……………村上 寛……………二八七	
シオランにおける無の位相と展開……………藤本 拓也……………二八八	

目次

「関係」、「相統」、「あたかも」……………高木 保年……………二六九

第五部会

古代ギリシアにおける

神聖 (hieros) 概念について……………葛西 康德……………二九二

古代ローマにおける

religio 概念について……………小堀 馨子……………二九三

パウロの宗教的自覚について……………南部千代里……………二九三

創世記一章一節は、その一章の表題か……………野口 誠……………二九四

ヘブライ語聖書研究……………高橋 優子……………二九六

『啓蒙の弁証法』における反ユダヤ主義……………内藤 李香……………二九七

改宗制度にみる

ユダヤ教のアイデンティティ定義……………櫻井 丈……………二九八

スピノザとユダヤ世俗主義……………平岡光太郎……………二九九

ユダヤ教におけるギリシア文化の衝撃……………市川 裕……………三〇二

聖人の誕生……………岩崎 真紀……………三〇三

クザーヌスにおける「神の名」の問題……………島田 勝巳……………三〇三

永遠についての瞑想……………福岡 揚……………三〇四

「アーリア人イエス」の宗教史……………久保田 浩……………三〇六

ミシェル・アンリの「キリスト教の哲学」

におけることばの問題……………古荘 匡義……………三〇七

ヨーロッパ・キリスト教の「信」……………若林 裕……………三〇八

トマス・ベリー神父にみる自然と身体……………木村 武史……………三〇

正義と配慮……………寺戸 淳子……………三一

第六部会

信徒が教えを担う条件……………田中久美子……………三三

天英院照姫と法華信仰……………長倉 信祐……………三四

『法華翻経後記』をめぐる諸問題……………金 炳坤……………三五

『法華驗記』にみる

いわゆる「妙法経力」の諸相……………間宮 啓壬……………三六

日蓮聖人における

『摩訶止観』受容の問題……………奥野 本勇……………三八

日蓮と預言者類型……………笠井 正弘……………三九

長松日扇の教化活動の一研究……………武田 悟一……………四〇

近世日蓮宗寺院文書にみる海防と寺院……………木村 中一……………四二

『立正安国論』稿了の期日について……………関戸 堯海……………四三

西田の場所的論理とカントの対象論理……………岡 廣二……………四四

鈴木大拙と『大乘起信論』……………嶋本 浩子……………四五

西谷啓治における

「近代日本」とニヒリズム……………秋富 克哉……………四六

清沢満之の内観主義……………村山 保史……………四七

斎藤茂吉の老いの諸相……………小泉 博明……………四九

フリッツ・シュオンと井筒俊彦……………中村廣治郎……………五〇

第七部会

親鸞の利益観について……………中山 彰信……………五三

真宗大谷派の北海道開教に関する一考察……………福島 栄寿……………五三

曾我量深における信の論理……………陳 敏齡……………五四

目次

近代日本における仏教と科学	常塚 聰	三三五
近代真宗本願寺派教団と初期関東別院	野世 英水	三三七
真宗障害者福祉における「自立」考	頼尊 恒信	三三八
三願転入とカウンセリング	友久 久雄	三三九
真宗信者の宗教意識と		
社会的行動に関する調査	ウーゴ・デッセイ	三四〇
現代社会における		
日本宗教とメディア	エリザベッタ・ポルク	三四三
宗教心理と浄土真宗	林 智康	三四三
初期真宗教団の原風景	安藤 章仁	三四四
存覚における聖道門理解の一考察	赤井 智顕	三四五
豊前崇廓師の教学及び		
行実に関する一試論	恵美 智生	三四七
親鸞の「浄土」について	加藤 智見	三四八
超越論的自覚と親鸞の「三心」釈	中山 一萱	三四九
親鸞における「少善」について	平原 晃宗	三五〇
親鸞伝承の始原試考	御手洗隆明	三五三
第八部会		
善光寺時供養板牌における一考察	小林 順彦	三五四
『宝性論』と『仏性論』	末村 正代	三五五
徳一『真言宗未決文』へ即身成仏疑へに		
ついて	環 栄賢	三五六
一遍教学の一試論	長澤 昌幸	三五七
明遍教学と静遍教学	那須 一雄	三五九
「五悪段」生成に関する一試論	加藤 弘孝	三六〇
一条兼良『勸修念仏記』とその時代	龍口 恭子	三六一
現代社会と浄土思想	五十嵐隆幸	三六三
臨終における光明表現再考	神居 文彰	三六四
存覚上人における来迎思想	平井幸太郎	三六五
中世武士と一遍・時衆の周辺	大山 眞一	三六六
横川顕正と浄土教	和田 真二	三六七
慈雲の袈裟研究と実践の意義	松村 薫子	三六九
慈信房善鸞上人義絶問題について	藤井 淳	三七〇
第九部会		
史的ダルマ論の試み	宮村 重徳	三七三
起塔を通じた永遠の釈尊の感得	鈴木 隆泰	三七三
『大毘婆沙論』成立の諸問題	三友 健容	三七四
『阿毘曇心論』業品における		
三障の軽重について	智谷 公和	三七五
『中論』の空性理論における		
矢島羊吉博士の理解について	木村 俊彦	三七七
受戒健度に於ける仏伝	龍口 明生	三七八
吉蔵と『摂大乘論』	藤野 泰二	三七九
『十地経』における		
第九地の位置について	平賀由美子	三八〇
日本律蔵関係章疏にみられる		
朝鮮仏教認識について	福士 慈稔	三八三
華嚴思想における理と事	宮野 升宏	三八三

目次

日本中世の寄進状について……………	稲城 正己……………三八四	教団変革期における体験談の変容……………	武井 順介……………四〇七
日本近世初期における		第十一部会	
仏教支援ネットワークについて……………	高井 恭子……………三八六	旅順博物館所蔵の漢文無量寿経写本……………	三谷 真澄……………四〇九
近代ドイツ宗教思潮における仏教……………	春近 敬……………三八七	『医心方』と『外台秘要方』……………	多田 伊織……………四一〇
吉田兼好の死生観……………	新保 哲……………三八八	中国における「維摩詰」語釈の変遷……………	山口 弘江……………四一一
第十部会		中国における菩薩戒について……………	久田 静隆……………四一二
キリスト教とグローバリゼーション……………	岡光 信子……………三九〇	雑誌CEMに見る	
ビシュワスという信じ方……………	丹羽 充……………三九一	現代「アレヴィー」思想の変化……………	佐島 隆……………四三三
転換期仏教寺院における活動……………	高橋 嘉代……………三九二	少数派フィクスの理論と論客……………	松山 洋平……………四三五
パンニャーサジャータカ研究の意義……………	茨田 通俊……………三九三	「俗人」説教師の活躍と	
マハトマ・ガンディーと藤井日達……………	外川 昌彦……………三九五	イスラムにおける権威の問題……………	八木久美子……………四四六
渡辺海旭をめぐる		ジュナイド神秘主義におけるフナー論……………	澤井 真……………四四七
社会事業と仏教の関係性について……………	菊池 結……………三九六	仏教儀礼論の可能性……………	小野 真……………四四八
仏教思想に基づくケア論の展開……………	坂井 祐円……………三九七	カトリック神学と経済学……………	ハンス・ヨアヒム・ペピン……………四四〇
大正期の仏教教化をめぐる……………	熊本 英人……………三九八	主権論における	
近代日本における大学制度と		『日本の系譜』の可能性について……………	田中 悟……………四四〇
僧侶育成に関する一考察……………	江島 尚俊……………四四〇	チベットに伝わった	
祈禱寺院における信者獲得と固定化……………	阿部 友紀……………四四一	スマーガダー・アヴァダーナ……………	梶濱 亮俊……………四四二
、心會と教祖熊崎健翁……………	下村 育世……………四四二	『プラサンナパダー』に引用される	
「みかぐらうた」のひのきしん……………	堀内みどり……………四四三	『八千頌般若経』……………	庄司 史生……………四四三
天理教原典IIIにおける		サティイーをめぐる語りの重層性……………	田中 鉄也……………四四四
「かしもの・かりもの」の理……………	澤井 一郎……………四四五	インド民衆神話における救済……………	渡邊たまき……………四四五
戦後台湾における			
生長の家の受容層の変遷……………	寺田 喜朗……………四四六		

目次

第十二部会

瓦に見る水のモチーフ	春日井眞英	四七
白南準における禪	榎本 香織	四六
近代思想における児童文学の宗教性	大澤千恵子	四九
ブルターニュにおける図像と宗教性	中島和歌子	四〇
柳宗悦の自然観	本多 亮	四一
中世禅宗寺院の伽藍空間における		
宋代風水術の影響について	鈴木 一馨	四三
迷信・呪術・魔術	黒川 正剛	四四
Th・マン文学における「敬虔」の問題	掛川 富康	四五
神道思想のパラダイム	原 真和	四六
近世中期における還俗僧と「神道」	井関 大介	四七
久我長通撰『八幡講式』をめぐる	船田 淳一	四九
近世日本における宗廟観	井上 智勝	四〇
近代神社祭式の成立	竹内 雅之	四一
内務省神社局と神社調査	遠藤 潤	四三
内務官僚の神社観とその系譜	藤本 頼生	四四

第十三部会

江戸中期の戯作者・大江文坡の仙教	坂出 祥伸	四六
道教の瞑想における光のシンボリズム	長澤 志穂	四七
平田国学における体験的幽冥研究の展開	宇野 功一	四八
排仏論の根拠としての海外情報	森 和也	四九
淵岡山より見た藤樹の思想「良知・孝」	鈴木 保實	五〇

神道思想における生命主義的救済観	鈴木 一彦	四三
弘道館とその祭神	桐原 健真	四三
神祇伯白川家における鎮魂祭	山口 剛史	四四
北野天満宮瑞饋祭についての一考察	吉野 亨	四六
狩猟民の神話と世界観	山田 仁史	四七
古代北欧社会における血の復讐	中里 巧	四八
一九世紀神話学とチェンバレン	平藤喜久子	四九
世界神話学と世界宗教史	松村 一男	四〇
ジュリア・クリステヴァにおける		
「抑圧」と「聖なるもの」	斎藤 喬	四三
「心理臨床科学」の宗教	戸田 游晏	四三

第十四部会

現代巡礼における死の位相	岡本 亮輔	四五
聖地旅行をめぐる「支え合い」の歴史	板井 正斉	四六
身延山参詣記にみる巡拝寺院について	望月 真澄	四七
仏教教団と講集団の関わり	栗田 英彦	四八
モルデューの仏教について	原 隆政	四〇
アウグスティヌス時代の		
マニ教徒の自己理解について	山田庄太郎	四二
メソポタミアの「呪術師」	渡辺 和子	四三
戦間期ハワイ日系宗教と		
二つのナショナリズム	高橋 典史	四三
総力戦体制下における信仰と戦争	川口 葉子	四五

目次

日本の新宗教における	
国家観・天皇観と実践	塚田 穂高……………四七五
無縁遺骨と恨(はん)	工藤 英勝……………四七七
明治初期における	
教導職の「敬神愛国」観	藤田 大誠……………四七六
「特高教本」におけるナショナリズム	小島 伸之……………四七九
靖国をめぐる論議	丹羽 泉……………四八一
新宗教のナショナリズムと敗戦の神義論	對馬 路人……………四八二
第十五部会	
沖縄宮古島北部の祭祀儀礼について	川田 桂……………四八四
宗教的職能者の選択	越智 郁乃……………四八四
琉球の最高神女・聞得大君の	
神馬について	坂本直乙子……………四八六
戦後沖縄の火葬	加藤 正春……………四八七
里修験と陰陽道	小池 淳一……………四八八
ト占における	
宗教的職能者の関与について	亀崎 敦司……………四八九
受動性のアニミズム	長谷千代子……………四九〇
御霊信仰の展開過程	米井 輝圭……………四九二
ト占技術から	
思索・信仰・実証科学への展開	平野 孝國……………四九三
「霊場」における死者供養の具体相	徳野 崇行……………四九四
検証／顕彰される来歴	土居 浩……………四九六
韓国・円仏教の死者儀礼	川上 新二……………四九七
日本民間神楽の「白い布」	三村 泰臣……………四九八
新能の興行形式にみる宗教性	永原 順子……………四九九
江戸・明治期の随筆類における富士信仰	大谷 正幸……………五〇一
鎌倉時代の夢信仰の一断面	河東 仁……………五〇三
第十六部会	
Oxford Group Movement の活動と影響	葛西 賢太……………五〇四
西田天香の宗教教育論	河村 新吾……………五〇五
接触領域としてのオリシャ崇拜	小池 郁子……………五〇六
カルティニにおける	
「新しい時代」の人間像	相澤 里沙……………五〇七
シンガポールの国民統合と宗教間対話	山下 博司……………五〇九
文化としての宗教	堀 彩子……………五〇〇
多文化共生	野村 誠……………五一二
宗教間対話を支えるものとしての求道性	峯岸 正典……………五二二
二一世紀宗教間対話の潮流	山梨有希子……………五二四
宗教的生命倫理は可能か?	村上 喜良……………五二五
日本の大学における	
「生と死の教育」の可能性	冲永 隆子……………五二六
中有縁起と現代的いのち	金 永晃……………五二七
「縁起」の倫理学は可能か	前川 健一……………五二九
再生医療と生命倫理	洲上 恭子……………五三〇
宗教ツーリズムの生成と課題	松井 圭介……………五三二
環境法に関する一考察	太田 俊明……………五三三
宗教史跡の観光資源化	吉野 航一……………五三四

目 次

第十七部会

子育て支援活動における	井上ウイマラ……………五二六
スピリチュアリティの働き……………	井上ウイマラ……………五二六
医療・福祉現場における	
《ヒハラー僧》の現代的役割について……………	打本 弘祐……………五二七
現代の「お迎え」現象と聖衆来迎……………	大村 哲夫……………五二八
インターネット開発思想と	
宗教的共同性の邂逅……………	今井 信治……………五三〇
宗教の社会貢献の領域と形態……………	稲場 圭信……………五三一
社会的宗教と他界的宗教への序章……………	津城 寛文……………五三三
現象学的社会学における超越概念……………	諸岡 了介……………五三三
宗教とグローバル化……………	上村 岳生……………五三四
宗教と博覧の近代史……………	濱田 陽……………五三五
宗教の社会貢献活動についての	
運動論的視座……………	寺沢 重法……………五三七
養護教諭と子供達との人間関係……………	河西多津子……………五三八
近代日本における「宗教的情操」教育……………	齋藤 知明……………五三九
宗教文化教育と宗教情操教育の相違点……………	井上 順孝……………五四〇
国語教科書にみる	
インドの公教育の宗教的要素……………	澤田 彰宏……………五四三
川崎市田島小学校における	
神道教育事例の考察……………	中道 豪一……………五四三